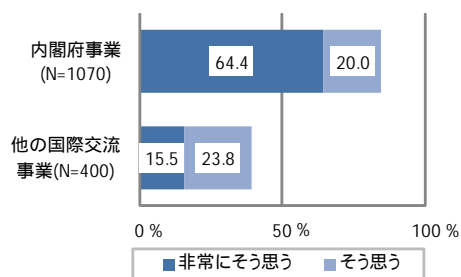
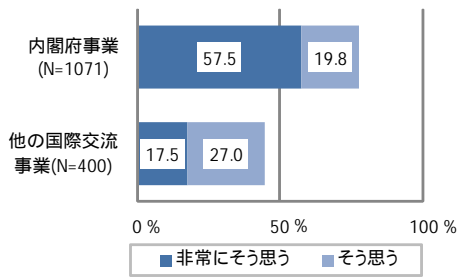


図表 事業参加による人脈やネットワークの広がり

< 全年齢 >

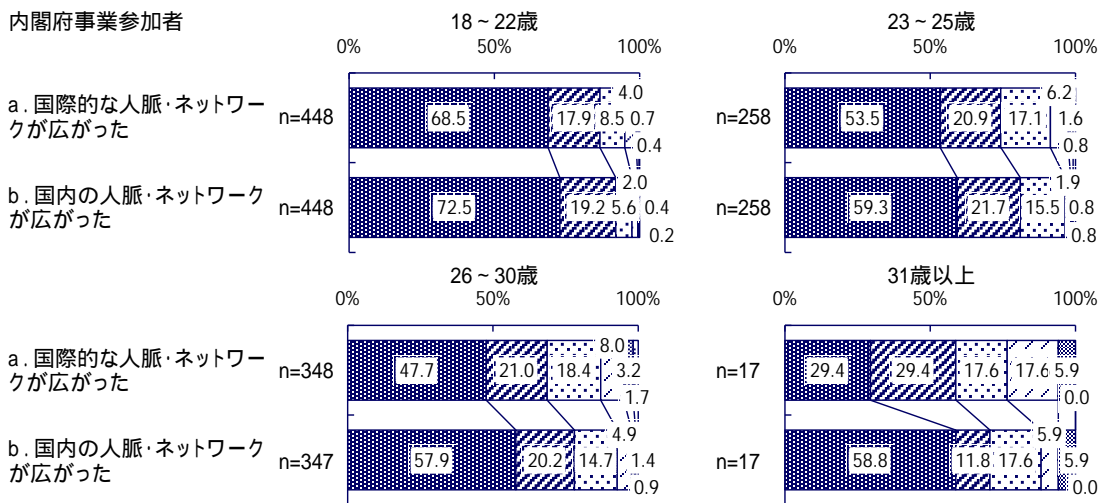
a. 国際的な人脈・ネットワークが広がった

b. 国内の人脈・ネットワークが広がった

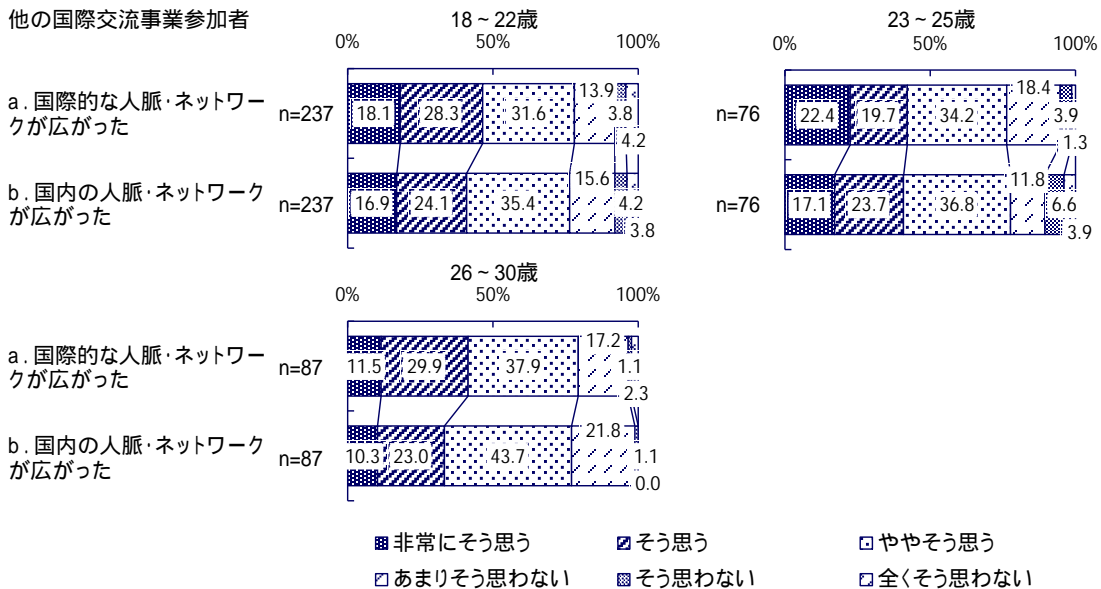


< 参加時の年齢別 >

内閣府事業参加者

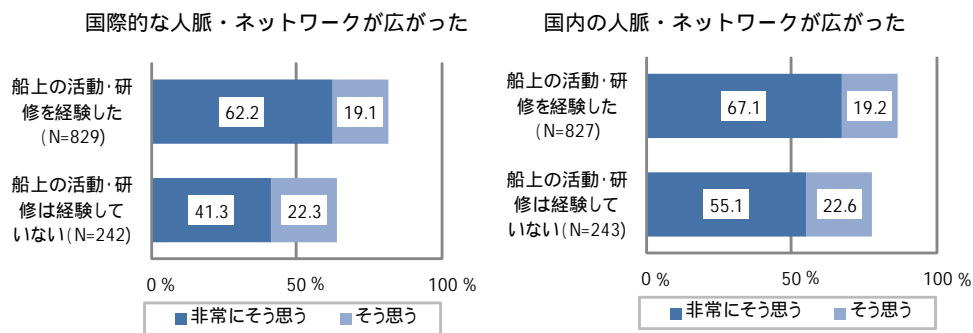


他の国際交流事業参加者



z 内閣府事業のうち船上活動の有無別では、船上での活動・研修を経験した方が、国際的な人脈・ネットワークが広がったと感じている（*）割合が高い（p.78）。

図表 事業参加による人脈やネットワークの広がり <内閣府事業参加者・船上活動の有無別>

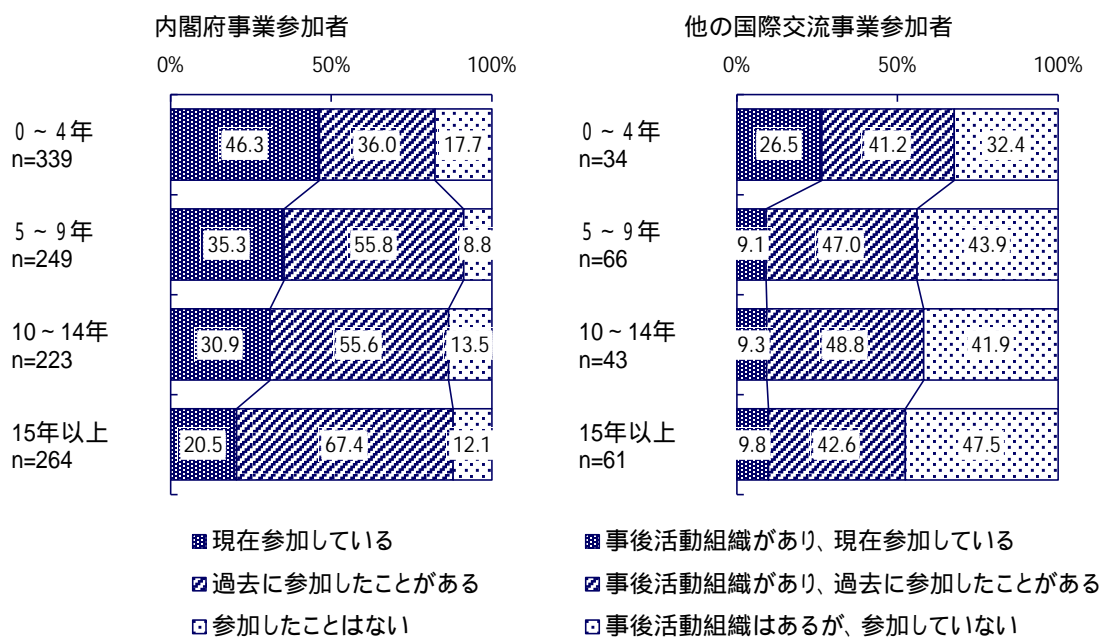


【3】事業参加後の事後活動の状況

後活動への参加状況

- 事後活動への参加について、内閣府事業参加者は「現在参加している」が34.2%、「過去に参加したことがある」が52.4%で、参加は9割近くに上る。他の国際交流事業参加者は、「現在参加している」が12.3%、「過去に参加したことがある」が45.1%である (p.82)。
- 内閣府事業参加者の場合、事業参加から15年以上を経ても約2割が現在も事後活動に参加している (p.86)。

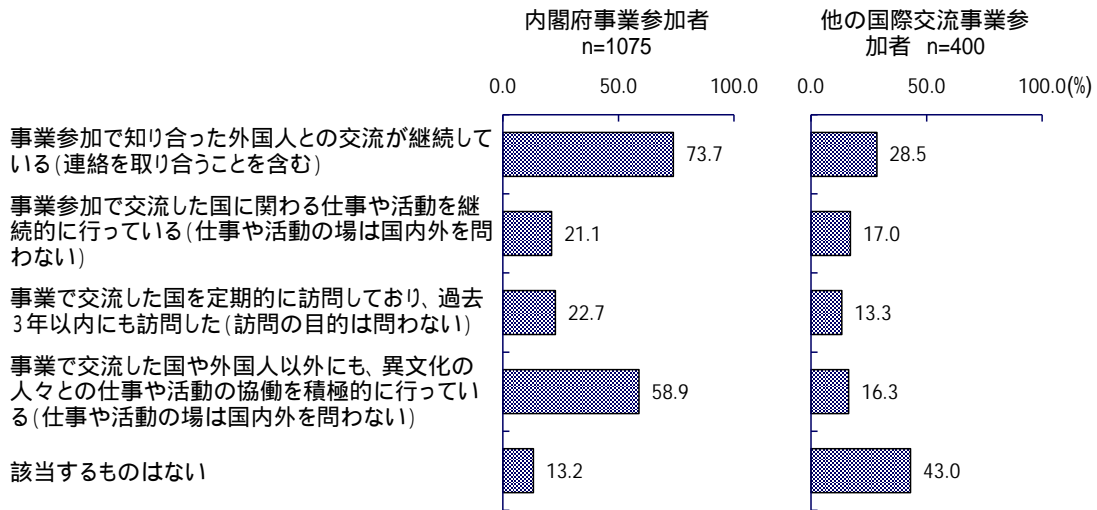
図表 事後活動への参加状況 <参加からの期間別>



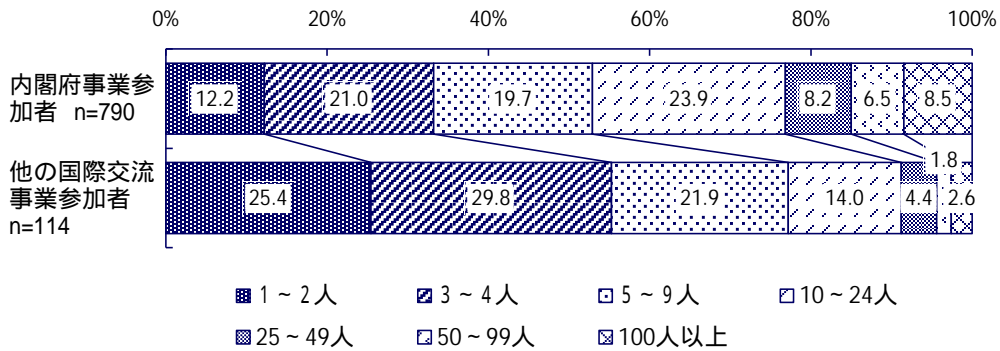
事業参加後の国際交流に関わる状況

- ① 事業に参加した後の国際交流の状況については、内閣府事業参加者の方が他の国際交流事業参加者よりも、「事業参加で知り合った外国人との交流が継続している」、「事業で交流した国や外国人以外にも、異文化の人々との仕事や活動の協働を積極的に行っている」と回答する割合が高く、交流が継続している外国人の人数も多い（p.90）。

図表 事業参加後の国際交流に関わる状況



交流が継続している外国人の人数



内閣府事業参加者以外調査票では「内閣府事業に参加した後の」が「国際交流事業等に参加した後の、」となっている。

- ① 内閣府事業参加者の場合、事業参加から15年以上を経ても半数以上が事業参加で知り合った外国人との交流が継続している（p.92）。
- ① 内閣府の事業種類別では、特に「東南アジア青年の船」事業において、「事業参加で知り合った外国人との交流が継続している」の割合が約9割と高い（p.93）。

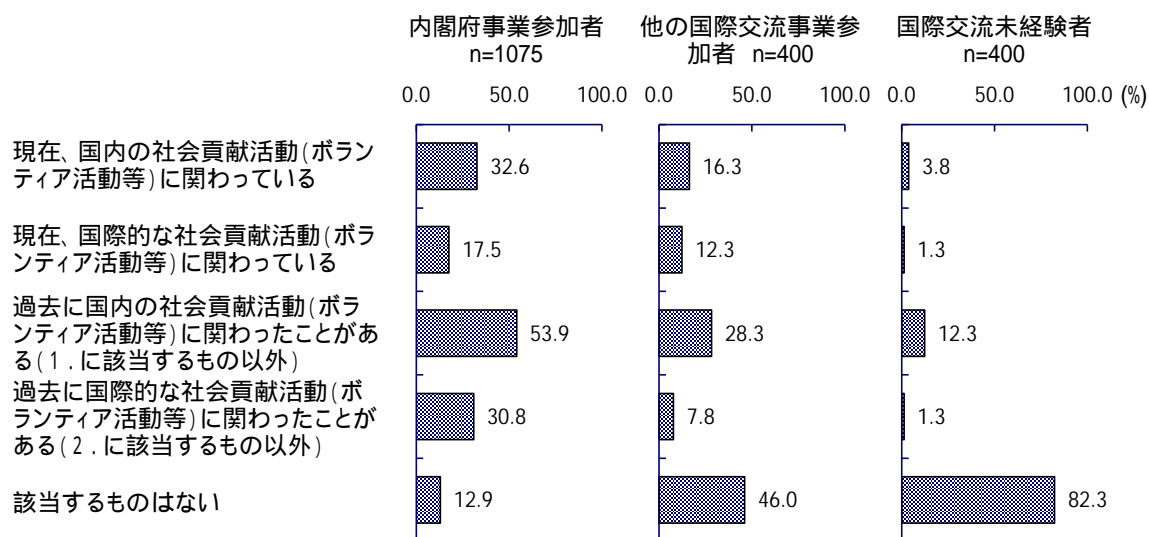
【4】社会貢献活動やキャリアの状況

会貢献活動（ボランティア活動等）への参加状況

- ② 社会貢献活動（ボランティア活動等）への参加について、内閣府事業参加者は9割近くが参加しているが、他の国際交流事業参加者は約半数が参加、国際交流未経験者は約8割が参加していない（p.94）。

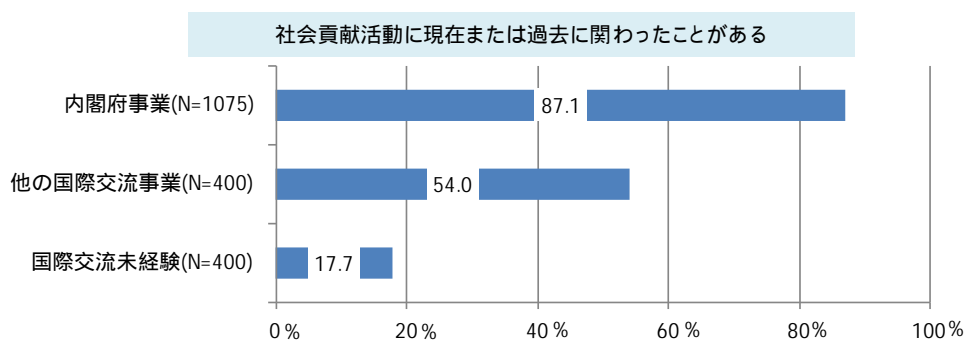
図表 社会貢献活動への参加状況

< 活動別・参加経験別 >



< 参加経験別・参加合計 >

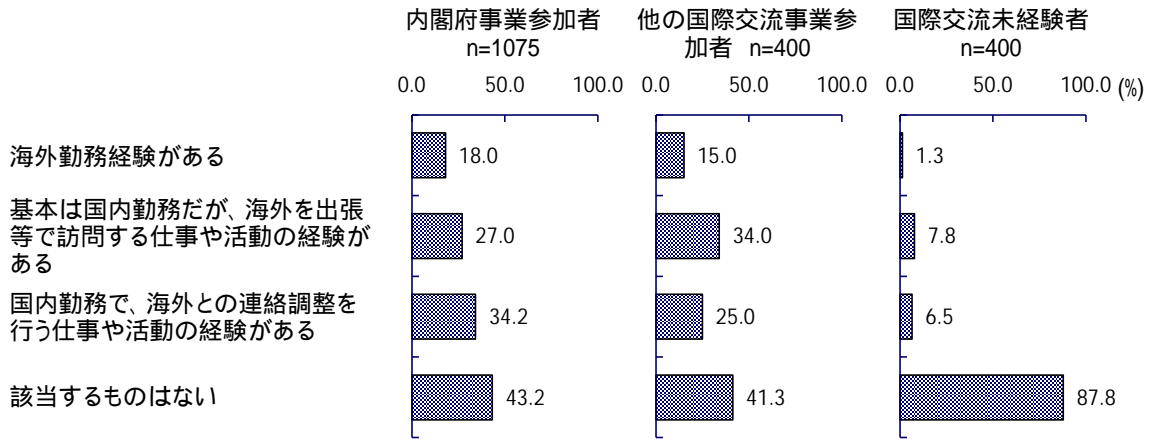
社会貢献活動に現在または過去に関わったことがある



海外勤務その他グローバルな活動の経験

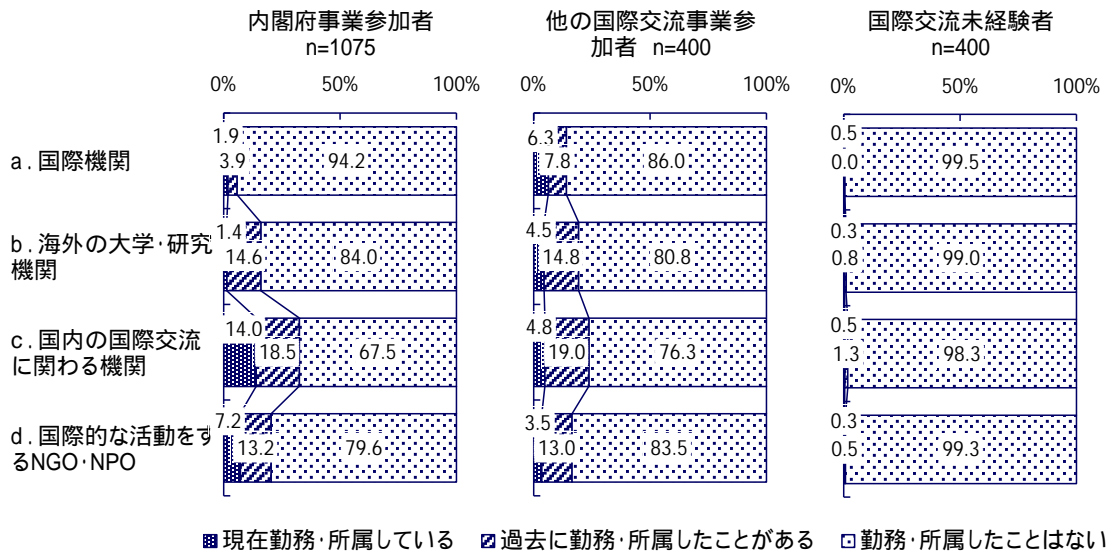
① 国際交流未経験者に対して国際交流事業参加経験者は、海外と接点がある仕事や活動を経験している割合が高い (p. 102)。

図表 海外勤務その他グローバルな活動の経験



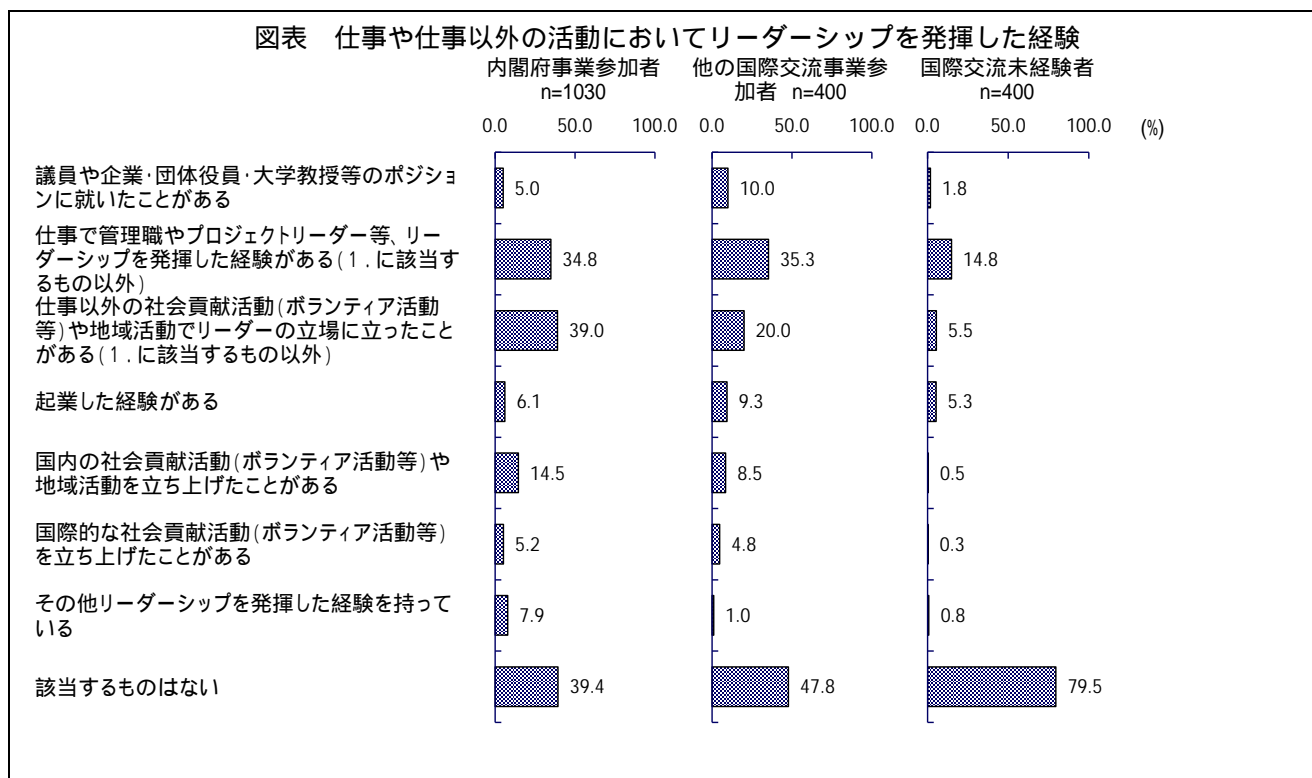
② 国際的な機関・団体への勤務・所属の経験については、「現在勤務・所属している」で見ると、「国際機関」と「海外の大学・研究機関」については他の国際交流事業参加者で最も割合が高い。他方、「国内の国際交流に関わる機関」、「国際的な活動をする NGO・NPO」については内閣府事業参加者で最も割合が高い (p. 108)。

図表 国際的な機関・団体への勤務・所属の経験



仕事や仕事以外の活動においてリーダーシップを発揮した経験

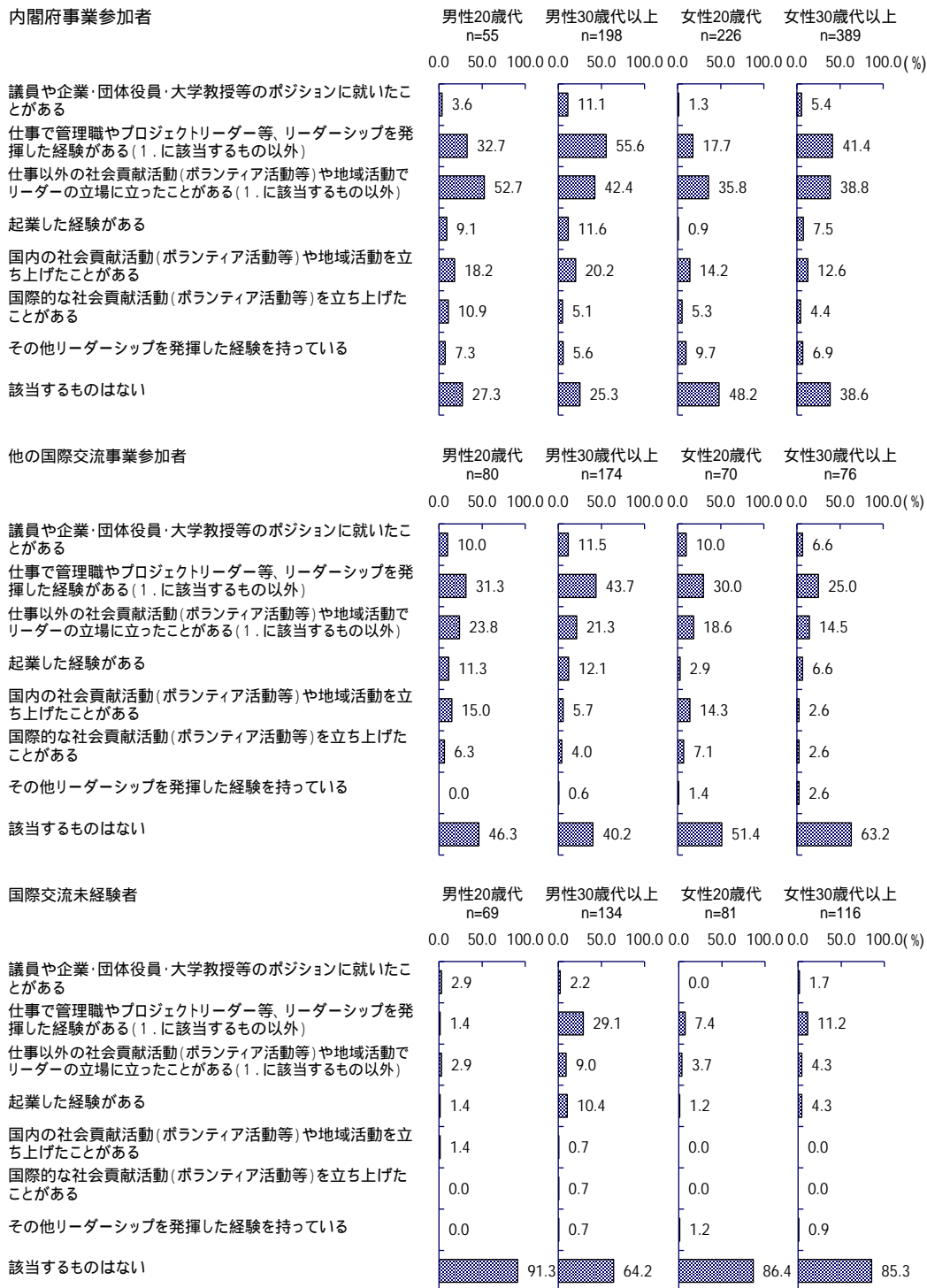
- ㊦ 仕事や仕事以外の活動においてリーダーシップを発揮した経験は、国際交流未経験者に対して、国際交流事業参加経験者は経験したことがある割合が高い。経験の内容については、内閣府事業で参加者において「仕事以外の社会貢献活動や地域活動でリーダーの立場に立ったことがある」の割合が高い（p.113）。



- ㊦ 上記の結果について、就業者のみを取り出して性年齢別にみると、「仕事で管理職やプロジェクトリーダー等、リーダーシップを発揮した経験がある」との回答割合は、男女共に20歳代では内閣府事業参加者よりも他の国際交流事業参加者の方が高いが、30歳代では内閣府事業参加者の方が高くなる（p.118）。

図表 仕事や仕事以外の活動においてリーダーシップを発揮した経験

< 性年齢（就業者のみ）別 >

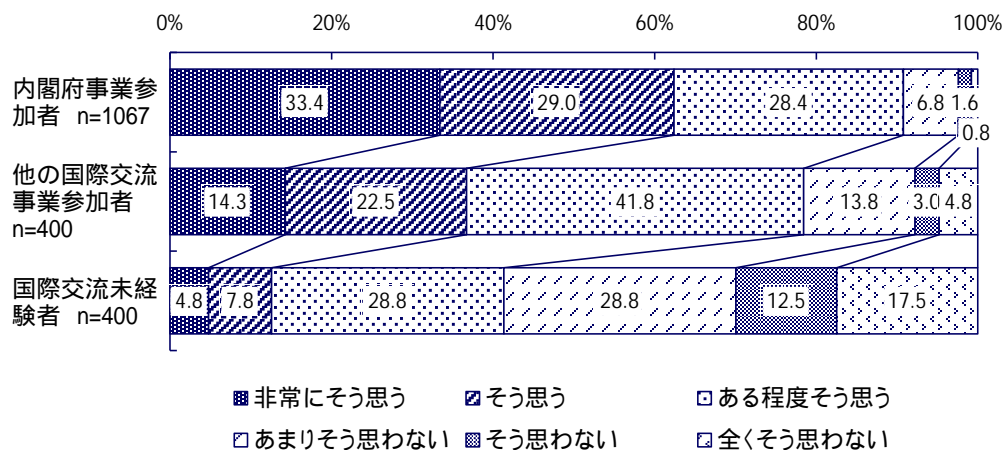


なお、上記 ~ のいずれも、内閣府事業参加者においては、事業参加経験が「非常に役立っている」と回答する割合が半数前後に上る (p.98, 107, 122)。

キャリアや人生を主体的に切り拓くことができてきたか

② キャリアや人生を主体的に切り拓くことができてきたかについては、内閣府事業参加者が「非常にそう思う」が 33.4%、「そう思う」が 29.0%など、それを肯定する意見が他の群に比べてきわめて高い (p.126)。

図表 キャリアや人生を主体的に切り拓いてきたと感じているか



【5】スキルの保有・開発の状況

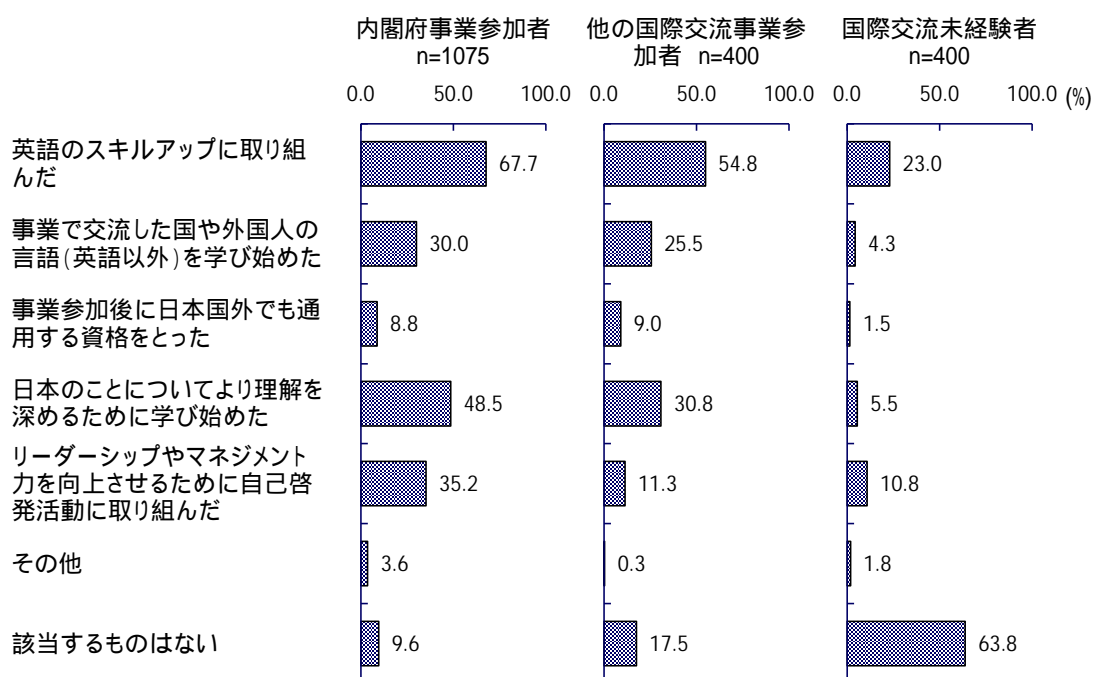
学レベル

- ① 語学レベルは、内閣府事業参加者 > 他の国際交流事業参加者 > 国際交流未経験者の順で高い (p.130, 131)。

各種スキル開発への取り組み状況

- ② 各種スキル開発への取り組み状況は、概して国際交流未経験者よりも国際交流事業経験者において取り組んでいる割合が高く、かつ内閣府事業参加者において「英語のスキルアップ」、「日本のことについてより理解を深めるための学び」、「リーダーシップやマネジメント力を向上させるための自己啓発活動」等について取り組んできた割合が高い (p.132)。

図表 各種スキル開発への取り組み状況



内閣府事業参加者以外調査票では、「内閣府事業への参加」が他の国際交流事業参加者では「国際交流事業等への参加」、国際交流事業未経験者では「あなたは社会人になってから」となっている。

リーダーシップやグローバル対応力に関するスキルやマインドの状況

- ④ リーダーシップやグローバル対応力に関するスキルやマインドについては、いずれの項目についても内閣府事業参加者 > 他の国際交流事業参加者 > 国際交流未経験者の順で獲得していると感じている（*）割合が高い（p.138）。

以上

4 ヒアリング調査結果のまとめ

(1) 事業参加について

【1】内閣府青年国際交流事業に参加したきっかけ・理由

- ① 過去の内閣府事業参加者が知り合いにいたことから事業を知り、彼らの活躍ぶりを見て参加を決意した。
- ② 内閣府のプログラムは、どこの国にも属さない船上で、というのが、自分で考えていた国際交流の理想の形に近かった。
- ③ 学生時代に聞いていたNHK ラジオ講座のテキストの後ろに事業の募集要項が掲載されており、参加できる年齢になったら是非参加したいと考えていた。
- ④ 国際青年育成交流事業への申し込みがきっかけで他の内閣府事業についても知り、世界船の方が面白そうで視野が広がるのではないかと、船に乗って研修出来る機会は一生ないだろうと思い、翌年は世界船に応募した。
- ⑤ 県主催の国際交流事業に参加した際に、参加者と情報交換する中で内閣府事業のことを知った。
- ⑥ 同じ時期に、数ヶ国を訪問し、(単なる観光ではなく)現地視察出来るというのは非常に興味深いことだと思った。

【2】参加したプログラムのうち、最も印象に残っていること、影響を受けたこと

- ① 言葉や文化、習慣、宗教等が違って、結局人はみな同じなのだということを実感した。
- ② 乗船後、2週間ほどたつと皆本音が出て、衝突が生まれ、意見交換が始まる。社会と隔離され、言葉も通じない環境の中での極限状態を共に乗り越えていくことで、相手を理解したいという意欲を育み、絆を深めていった。
- ③ 参加した他の交流事業と内閣府事業が明らかに異なるのは、人間関係の密度である。船という逃げ場のない空間においては、否応なし強く濃い一体感を感じざるをえない。
- ④ ただ行って、見て帰ってくるだけでなく、その国の人たちと語ったり、寝食を共にする中で、その国の人たちが何を考えているのかが分かる。そこがとても重要だと感じた。
- ⑤ 海外青年たちは、日本の参加青年に比べ、将来ビジョンをしっかりと持っている。彼らと交流することは、知的面で非常に楽しかった。
- ⑥ 同じグループのメンバーに対し、怒りを爆発させるという事件を通じ、正面からぶつかりあえたからこそ得られる相互理解というものがあるのだということを実感した。事業が終わってからもいい関係を継続していられているのは、その場で本音を伝えあって解決してきたからこそだと思っている。
- ⑦ 船で出会ったアラブの人々の「同胞を大事にする」温かさに魅了された。同胞という集団に重きを置き、彼ら同士や更に彼らと友達になった私たちのことまで気にかけて、大切にしてくれるアラブ人たちの姿勢に、日本人と共通するものを見出した。
- ⑧ 最も印象に残っているのはタイでのホームステイである。英語がそれほど得意でなくても何とかしてコミュニケーションを取ろうとして、温かくもてなしてくれた。
- ⑨ 参加者の名刺を作る係を担当した。当時は20歳だったので、業者とやり取りすること・価格の交渉・お金の管理など、社会勉強になった。

(2) 事業参加後の国際ネットワーク形成や社会貢献活動について

【1】事業参加をきっかけとして、継続している国際的な交流について

- ① 参加したことで世界中に友達が出来た。参加後もお互いに行き来したり、メールや手紙を交換したりしている。
- ② 遠くの人と心が繋がっていると感ずることにより、色々なことを地球規模で考えられるようになった。
- ③ 参加後の留学先で、現地出身の外国青年に会いに行った。
- ④ 東南アジア船参加者の同窓会である SIGA が日本で開催された際に参加した。
- ⑤ 日本とアジア諸国の文化交流を進めるための様々な活動(協議への参加、メディアへの出演、執筆等)をおこなっている。
- ⑥ 内閣府事業のネットワークを活かし、東南アジアを日本に、日本を東南アジアに紹介する取り組みについて計画を進めている。

【2】事後活動組織において実施している活動について

- ① 事前研修での講義。
- ② 日本青年国際交流機構が主催するイベントでの講演。
- ③ 留学中、シンガポールの事後活動に参加。
- ④ 全国大会や、地方プログラムの受け入れ等において中心となり活躍。
- ⑤ 参加後にもスタッフとして乗船させてもらったり、他事業へ参加させてもらったりしている。

【3】実施している社会貢献活動について

- ① 学校支援活動。
- ② 被災地の復興支援。
- ③ NHK 文化センターでの講座開講。
- ④ フィリピンのストリートチルドレン支援活動。
- ⑤ 日本インド学生会議のサポート。
- ⑥ アジアにおける異文化理解を目的としたウェブサイトの運営。
- ⑦ 大学などでの講演。
- ⑧ 幼稚園や学校でチョコレート教室を開いている。事業で得たものを社会に還元しているという意識でおこなっている。
- ⑨ 事業参加経験を活かして、現地目線で人と関われる国際交流プログラムを実現するために、日本の学生を受け入れるシンガポールのスタディツアーを企画。

【4】参加をきっかけとして、異文化理解や自国文化の理解のために取り組んでいること

- ① アジアのニュースを、現地メディアを重視しながらチェックしている。ある出来事も、彼らの視点ではどのように捉えられるのかという点を大切にしている。
- ② 大学で短期語学研修プログラムを担当し、学生を送り出している。
- ③ 参加前より茶道教室に通い、船上でのクラブ活動ではお茶を点てるなどの活動をした。帰国してからもしばらく茶道教室に通っていた。

【5】語学力や国際的に通用する資格取得等、自己啓発で行っていること

- ⑦ 参加後、海外の大学・大学院へ留学した。
- ⑧ 船でブルネイ人と仲良くなり、もっと覚えたいと思ったことがきっかけで、帰国後、インドネシア語を習った。
- ⑨ 日本語教師の資格を取得した。
- ⑩ 発展途上国でボランティア活動を行った。

【6】事業で得た人脈やネットワークが仕事や社会貢献活動に役立っている例

- ① アジア人との交流から得たヒントやインスピレーションを、執筆作品に生かしてきた。
- ② 他の参加者の事務所に勤務し、コーチングやファシリテーションについて学んだ。
- ③ 起業する際は、内閣府事業を通じて形成した人脈（同期だけでなく、事業参加者OBとの繋がりが非常に役立った。繋がりが活かされたかどうか、事業参加経験を活かされたかどうかだと思う。
- ④ 得たものの中で大きいのはやはりこの事業のネットワーク。このネットワークがあったからこそ、スタディツアーの企画ができたし、国や世代を越えて年配の事業参加OBと話す機会もあった。どこへ行っても、「We are SSEAYP family!」と歓迎してもらえる場所があるのが心強い。
- ⑤ 東日本大震災の復興支援活動で、自身が代表を務めるNPOとIYEOの活動とが繋がっている。IYEOからの支援は、被災地のニーズを的確に把握した素晴らしいものであった。このような素晴らしい支援が1つの団体で出来るというのは本当に凄いこと。IYEOでなければ出来ないことだと思う。

(3) 参加後の自身の能力向上やキャリア形成について

【1】リーダーシップやマネジメント力向上において事業参加経験が役立っていること

- ① どんどん引っ張っていくというよりは、様々なバックグラウンド、異なる考え方を持つ人たちがいるということを理解し、そのうえで皆がうまく1つの方向に向かって進めるようコーディネート、プロモートするという立場でリーダーシップを発揮した。
- ② 大学での授業においては、学生同士又は学生 自分、学生 学生のインタラクション、学生同士が集まって自主的に取り組む活動を重視している。船上活動で様々なグループワークを経験し、このような考え方を持つようになった。

【2】調整・交渉を進める実践的な能力向上において事業参加経験が役立っていること

- ① 人と議論する時や、共同で何かをおこなう時には、相手の心情を相手の立場にたって考慮すること、相手の話を良く聞き、共有し、巻き込んでいくことにより、衝突を避けることができる。
- ② 学校支援プログラムの提案時には、上からこうしましょうという態度ではなく、先生方の想いを伺った上で提案していく姿勢を見て貰うことを心がけることにより、営業活動をしなくても先生方から依頼を多く頂けるようになった。
- ③ 人とコミュニケーションを取る際、日本人は待っていてくれるところがあるが、船に乗ったら外国人はそうではなかった。自分から率先して話しかけるようになった。
- ④ 船上で意見の相違を話し合って解決したことが、自分にとって非常に良い経験となった。

【3】キャリア形成や人生に関して影響を受けたこと

- ① 人はピンチにならないと本当に真剣にはならない。船上ではみんなが危機的な状況に陥り、パニックを経験し、そこから自分のコントロールの仕方や問題の乗り越え方を学び、切り開いていった。人間を根本から育て、自立させることが出来るのが世界船だと思っている。
- ② 船に乗り、自分なりのパフォーマンスが出来たことで、世界の中でも通用するじゃないか、という自信が持てた。
- ③ 同時に、船の中で、同世代の日本人の若者たちが、自分のことを全く話せないことに問題意識を持ち、教育について考えるようになった。
- ④ 日本人の無宗教性、意見を言わない特性は逆に、ファシリテーター役として、世界で役立てていけるのではないかと考えた。
- ⑤ 東南アジア各国のエリートたちと交流し、生の東南アジアに触れたことが、それまで持っていたイメージとは全く異なる「発展するアジア、豊かなアジア」という新しいアジア感を形成する原体験となった。
- ⑥ 日本参加青年も他国からの青年も、自分にとっては会うだけで刺激になる優秀な人の集まりで、質の高いネットワーク。そのため、日本人参加青年に会うことでも大いに刺激を受けるしモチベーションになる。
- ⑦ 世界船に乗ったことがきっかけでアラブに魅了され、中東研究のコースへ進路を変更した。そのまま博士課程へと進み、今に至っている。まさに、世界船でアラブに出会わなければ、今の自分はなかったと言える。
- ⑧ 事業の中で障がい者施設などを見学したことや、船上で体調を崩した時に看護師の方にお世話になり、その働きぶりを見たことがきっかけで、看護師になることを決心し、現在は大学で看護学を専攻している。
- ⑨ 参加直後は、自分のやるべきことが分からず模索状態が続き、世界船の意義についても疑問を抱いていた。しかし、参加から時間が経つにつれ、様々な活動に関われば関わる程、事業の意味、IYEO ネットワークの深さと強みを理解し、実感するようになった。今ではこの事業への参加は自分にとって絶対必要だったと確信している。

【4】現在の会社や所属機関等から期待されている役割

- ① 仕事の取捨選択における判断の軸は、「人の幸せ」に関わっているかどうか。その思いは、世界船に乗ってより一層強く、具体的になった。
- ② 国対国の関係が、たとえ一時的に悪化したように見えても、それを正常化していくのは結局人と人との関係である。その国を愛しいと思う個人の想念が、世界を最悪の事態から救うことも出来るかもしれない。だからこそ今後も、アジアの魅力を人々に発信し続けたいと思う。
- ③ 世界船や、その他の国際交流経験を通じて、自分自身が現地に行ったからこそ見えるものや言えることがあるということを痛感した。だからこそ本学の学生たちにも現地に行って欲しい、そういう機会を与えたい、という思いで語学研修プログラムを担当している。

(4) その他

【1】今後の内閣府事業について

- ① 事業の内容が年々変わってしまうと、継続性が調べきれないうえ、事業自体がブレているという印象も加わってしまう。内容の見直しや刷新はもちろん必要だが、持続性を担保している方がより有益な結果に繋がるのではないだろうか。
- ② 「新しいものへの出会い 気持ちの高揚 問題への直面 会得」という学びのサイクルを考慮すると、航海期間は最低でも1ヶ月は必要である。
- ③ 長期間(2カ月)かけて船で世界をまわったからこそ、地球は丸くて、世界は繋がっているんだということが実感できた。
- ④ 国内航海ではどうしても日本人に安心感が生まれてしまう。全員が危機的な状況で共通の体験をすることが重要である。
- ⑤ 寄港地では、短い時間でも良いので出来るだけ現地の人の生の生活に触れられる活動をするとう良い。
- ⑥ 地域が若者のリーダーシップ育成のために投資をしていくという形で、民間と共同で開催しても良いのではないか。
- ⑦ 情報誌では、壮行会の報告等ではなく、現在この参加者はこのような活動をしています、というような内容を盛り込むことにより、もっとネットワークが広がっていくと思う。

【2】参加時の年齢や立場による違い(学生としての参加、社会人としての参加の違い)

- ① 参加時の年齢が低いほど、受ける影響は大きいと思う。
- ② (学生として、第28回(平成13年度)「東南アジア青年の船」事業参加の後、大学院への進学、社会経験を経て、第36回(平成21年度)に再度参加。)学生として参加した回では、異文化理解という側面に加えて、社会人としての考え方や言動といったことについて気づきを得て、学ぶ機会があった。ただし、一定割合、社会人が参加していないと、このような機会には恵まれないだろう。
- ③ 参加している学生の間でも、年次によって参加することによる学業や就職への影響という点で懸念を持っていた者もいたようである。就職先(内定)を得た4年生は、時間的には余裕があるけれども、参加後に進路を変更することが難しいようで、もっと早く参加しておけばよかったと思うケースも少なくない。3年時の参加は、参加後に自身の進路を決めていく猶予はあるが、同時に就職活動に出遅れてしまうことを心配する学生もいるようである。
- ④ 社会人は、教員や自治体等からの派遣という形式で参加する方が多く、民間企業からの参加比率は低いように感じた。また、在職中に参加することよりむしろ、事業参加のために企業を退職されている方もいた。そのような方の中には、次の自身のキャリアを見定めて、その道に進むために、参加を決断したケースが多いように感じる。退職されて参加する社会人は、事業参加を通じて、自身のキャリアチェンジに関する想いやそれを支える価値観をゆるぎないものにしていくようにも思う。
- ⑤ 学生参加者は、地域や専攻などの多様性が一定程度、担保されているが、社会人の参加者についても、公務員に加え、民間企業の経験者も含まれるようになれば良いと思う。

以上